

児童期において共感性が分配行動に 及ぼす影響について

筑波大学心理学系 渡辺 弥生

The effects of dispositional empathy of children on sharing

Yayoi Watanabe (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of the present study was to investigate the effect of dispositional empathy on sharing. Third- and fifth-grade children ($N=224$) were studied. All subjects completed the Interpersonal Reactivity Index (IRI; Davis, 1983), which was translated into Japanese, with minimal modification to enable children to understand. This index attempts to measure empathy as a multidimensional phenomenon. Then subjects were given two kinds of surveys to examine how they share rewards between them when they contributed more (also less) work than their co-workers. Results indicated that high-empathic children tended to distribute altruistically or equally and that low-empathic children were prone to employ equity norm or act selfishly. It was clear that causal attribution about the difference between their contribution influence on both empathy and reward allocation.

Key words : dispositional empathy, children, sharing, reward allocation

問 題

共感性は、向社会的行動を動機づけるものとして、従来さまざまな角度から行動との関係が検討されてきている (Aronfreed, 1970; Hoffman, 1975; Batson, Duncan, Ackerman, Buckley, & Birch, 1981; Toi & Batson, 1982; Krudson & Kagan, 1982; Iannotti, 1985; Barnett & Thompson, 1985). 向社会的行動の中でも分配行動との関係を見たものに以下の研究がある。浜崎 (1985) は、6歳児を対象に、他者のいる場面といない場面とを設定し、共感性が分配行動にどのような影響を及ぼすかを検討した。その結果、共感性の高い群では他者の在、不在に関わらず、「かわいそうなこども」に対して、自分よりも相手に多く分配した。これに対し、共感性の低い群では、他者の在、不在により他者への分配量が異なり、他者がいる場合に相手に多く分配していること傾向が見られ、共感性や他者の在・不在が分配行動を規定する要因として示唆された。

また、Shirley (1979) は、小学校4年生を対象にして、依存性、共感性と分配行動との関係を検討し

ている。その結果、性差が見られ、女子は他者の存在に関わらずに、相手に多く分配する傾向が見られたのに対し、男子は他者がいる場合には相手に多く分配する傾向があり、社会的望ましきの影響を強く受けていることが明らかになった。

分配行動はこれまで向社会的行動の一範疇として扱われており、向社会的行動研究の行動場面においては上記の研究のように分配場面を設定する傾向が少なくなかったといえる。向社会的行動研究における分配行動は、行動の測度として、自分より他者に多く分配するか、あるいは、自分の方が多く取るかという、分配数についてのみ注目されていた。すなわち、共感性が高ければ高いほど相手への分配数が多く、相関関係にあることが予測され検討されてきた。したがって、分析方法は、共感性得点と分配数の相関係数を出したり、共感性の高い群と低い群による相手への分配数の差を分散分析により検討したものがほとんどであった。しかし、公正に関わる分配行動についての研究を概観すると、必ずしも分配行動は向社会的行動の一つとして簡単に扱われるべきではないといえる。すなわち、分配行動は、相手

にいくつ分けたかという分配数だけが問題にされるべきではなく、どのような分配様式を選んだかという観点から扱われるべきものだからである。分配様式の選好については、公正に関わる認知と強く関係していることが公平分配原理(Adams, 1963), 平等分配原理(Sampson, 1975), 必要分配度原理(Schwarz, 1975), 互惠分配原理(Leventhal, 1976)などの理論によってそれぞれ説明されている。分配様式は、公平分配(ある2者間の分配に関しておのおのが投じたinputとそのみかえりであるoutputの比率が等しくなることを考えてなされる分配), 平等分配(相手と自分の受け取る報酬が等しくなるようになされた分配), 利己的分配, 愛他的分配などが代表的である。分配様式としてどれが選好されるかについての研究は、状況要因や、性別、年齢などの個体要因との関係を検討したものが数多く報告されている(Leventhal & Anderson, 1970; Leventhal & Lane, 1970; Leventhal, Michaels, & Sanford, 1972; Mikula, 1974; Shapiro, 1975; Landau & Leventhal 1976; Reis & Gruzen, 1976; Hook, 1978; Reis & Jackson, 1980; 渡辺, 1986)。

しかし、こうした公正な分配に関する研究において、パーソナリティ要因との関係を検討したものはほとんど見られないと同時に、先に説明したように、共感性の機能によって分配の選好を説明しようとした研究がまったくなされていないのが現状である。また、先行研究における共感性は、教示などにより実験的に操作されたものが多く(Batson et al. 1981; Toi & Batson, 1982), 個人のパーソナリティ要因として共感を測定したものは少なかった。Archer, Diaz-Loving, Gollwitzer, Davis & Foushee (1981)は、パーソナリティ特性としての共感性が、状況的に操作して得られた共感性よりも、情動的反応及び行動を強く規定することを報告している。換言すれば、状況要因以上の影響力がパーソナリティ特性としての共感性においてすでに個人差として存在していることを示唆している。Davis (1983)は、共感性を情動及び認知的側面を含んだ多元的なものとしてとらえ、個人のパーソナリティ特性として測定しうる新たな共感性尺度を作成するとともに、この尺度により測定された共感性が、情動的反応及び行為と強く関係していることを明らかにしている。

したがって、本研究では、共感性をパーソナリティとしてとらえ、それが分配行動の選好様式にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とした。

方 法

被験児：茨城県土浦市立A小学校3年生91名(男子50名,女子41名),小学5年生133名(男子58名,女子75名),計224名(男子108名,女子116名)。

手続き：①共感性調査：Davis, M. H. (1983)の共感性尺度28項目が大人対象のものであることから、児童用に訳したものが作成され用いられた(Table 1)。この尺度は、共感を情動的、認知的と限定せずに多次的にとらえている点で評価されるものである。測定は、「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」の4件法で実施した。

②分配行動調査：親戚のアルバイトを友だちと手伝い、お礼に報酬を与えられるが、それを2人でどう分配するかを問うものであった。回答は、選択式ではなく、あなたがいくら、おともだちがいくらとるかを()内に自由に記入させる方式をとった。作業量の比は、3対2の高貢献度条件と2対3の低貢献度条件の2通りであり、報酬は2000円であった。また、「作業量が異なったのはどうしてだと思いますか」という質問がなされた。

高貢献度条件の内容は以下のとおりである：

「夏休みに、あなたとあなたのおともだちは、しんせきのおじさんがやっているしんぶんやさんで手伝うことになりました。しごととは、しんぶんをおりたたむことでした。あなたは、60まいおりたたむことができましたが、おともだちは、40まいでした。あとから、あなたは、手伝ったお礼として2000円もらいました。おじさんは、『これはふたりぶんですけど、あなたの好きなように分けなさい。ともだちには、おじさんがわたすから、ともだちのぶんだけあとで持つてきなさい。』と言いました。」

調査は、高貢献度調査は6月に低貢献度調査は10月に実施した。

結 果

共感性尺度により測定された各項目の合計得点を平均値を基準にして3群に分けた。すわち、平均値+1SD以上を共感性高群(86.50以上)、平均値-1SDより大きく平均値-1SD未満を共感性中群、共感性-1SD以下(67.64以下)を共感性低群とした。代表的な分配行動として、平等分配、公平分配、利己的分配、愛他的分配の4つを選択し、共感性との関係を検討した。高貢献度条件においては、Fig. 1に示されるとおり、共感性の高いものに平等分配、愛他的分配が多く、共感性の低いものに公平分配と

Table 1 共感性調査項目と因子負荷量

因子項目	因子負荷量		
	第1	第2	第3
1. これから起こりそうなことを（未来のことを）空想することが多い	.44		
6. なにか大事な事が起きるとおちつかなくなるほうです	.47		
10. 気持ちがおちつかないとき、自分がなにもできない人間のように感じるときがある	.54		
16. テレビを見たあと、テレビの主人公になったように感じることもある	.49		
20. 自分が見たことで、とてもよく感動したことがよくある	.64		
22. 自分を心のやさしい人だと思いたい	.51		
23. よいテレビや映画を見ると、すぐにその主人公になったように感じる	.62		
24. あわてていると自分がなにをしているのかわからなくなる	.40		
25. だれかとケンカしても相手の気持ちを考えるようにしている	.46		
26. おもしろい本を読んでいると、もしお話のことが自分に本当に起こったら、どんな感じがするかを考える	.56		
27. とても困っている人が助けを求めているのを見るとあわててしまう	.54		
2. 自分よりも不幸な人をやさしく気づかうことがよくある		.42	
8. 何かを決心する時に自分に反対している人の気持ちや意見を考えてみる		.41	
11. ときどき友達がどんなことを考えているかを想像して友達のことをもっとわかってあげようと思うことがある		.73	
12. 本やテレビに夢中になってしまふことがほとんどない		-.48	
19. なにか大事なことが起こってもあわてないで正しく行動することができる		.58	
21. ものごとはすべて2つの点から考えることができると信じており、いつも2つの方向から考える		.65	
25. だれかとケンカをしても相手の気持ちを考えるようにしている		.42	
28. 人の悪口を言う前にその人の気持ちを考えてあげようとする		.60	
4. 友達がこまっいてもあまりかわいそうに感じないことがときどきある			.51
7. かわいそうなテレビを見ても泣いたり、おもしろいテレビを見ても笑ったりしない			.57
13. こまっている人を見ても平気でいられる			.71
14. 不幸な人を見ても何も感じない			.77
18. いじめられている人を見てもかわいそうに思わないことがある			.62

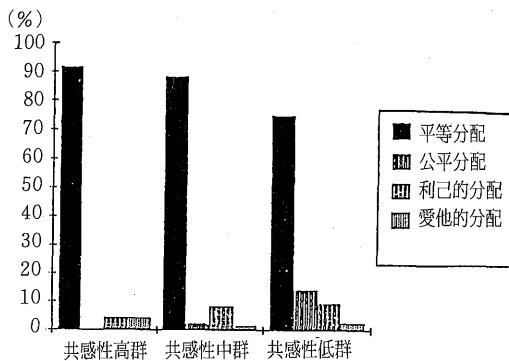


Fig. 1 高貢献度条件における共感性と分配行動

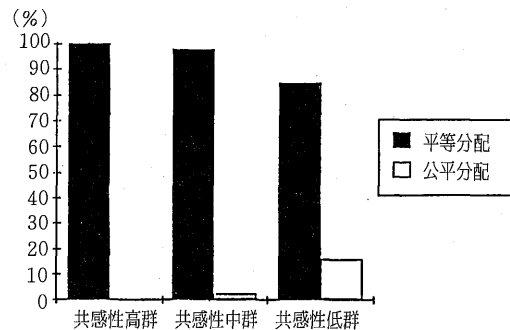


Fig. 2 高貢献度条件における共感性と2つの分配行動 (平等分配と公平分配)

利己的分配のもの割合が多かった ($\chi^2=19.30$, $df=6$, $p<.01$). 平等分配と公平分配の割合が全体に高いことからこの2つと共感性との関係を検討した結果, 有意であった. すなわち, Fig. 2 から明らかとなり, 共感性高群では平等分配が100%であるのに比較し, 共感性低群に公平分配の割合が高かった ($\chi^2=9.30$, $df=2$, $p<.01$).

低貢献度条件における4つの分配行動との関係においては, 共感性中群と低群に利己的分配の割合が高い傾向が見られたが ($\chi^2=12.14$, $df=6$, $p<.10$), 平等分配と公平分配と分配行動との間に有意な関係は示されなかった. また, 貢献度により分配行動が変化しているか否かが検討されたが, 有意な変化は示されなかった.

つぎに, 共感性尺度を主因子法により因子分析し, バリマックス回転を行った結果, その固有値が1.0以上で, 統一的な解釈が可能なる因子解を採用した因子負荷量が, 40以上の項目をとり上げて各因子を構成しているものとし, それぞれ「個人的苦痛及び感動」因子, 「共感的関心」因子, 「感受性」因子と命名した. その結果は, Table 1 に示したとおりである. 因子負荷量を検討した結果, 次の4項目が除かれた. 「ほかの人がどんなことを考えているのかを想像することはむづかしいときどき思う (項目番号3)」、「本を読んでいると, 本の中に出てくる人の気持ちになることがある (項目番号5)」、「だまされている人を見たら, 守ってあげたくなる (項目番号9)」、「自分がいったん正しいと思ったら, ほかの人の言うことは聞かない (項目番号15)」. Davisの尺度の構成部分である4つ (perspective-taking, fantasy, empathic concern, personal distress) よりも, 3因子の方があてはまりがよいため本研究では3因子を抽出し, 独自に命名した(注1). 各因子を

平均値を基準として3群に分け, 分配行動との関係を検討したところ ($\chi^2=12.42$, $df=6$, $p<.10$), 高貢献度条件では第1因子で個人的苦痛や感動を受けないものに公平分配が多い傾向が見られた (Fig. 3). 第2因子については, Fig. 4 に明らかとなり, 共感的関心の強いものに平等分配が多いのに対し, 共感的関心の弱いものに公平分配や利己的分配の多い傾向が認められた ($\chi^2=13.48$, $df=6$, $p<.05$). 第3因子については, 有意な関係は見られなかった. 低貢献度条件においては, 第3因子においてのみ有意な関係が見られ (Fig. 5), 感受性の高いものに愛他的分配の割合が高く, 感受性の低いものに利己的分配の割合が高い傾向が見られた ($\chi^2=15.13$, $df=6$, $p<.05$).

Table 2 に作業量が異なった理由があげられる. 頻度が最も多かったのは, 友だちの方が「一生懸命やった」、「熱心にやった」、「真剣にやった」で, つぎは「動作が早かった」、「器用だった」であった.

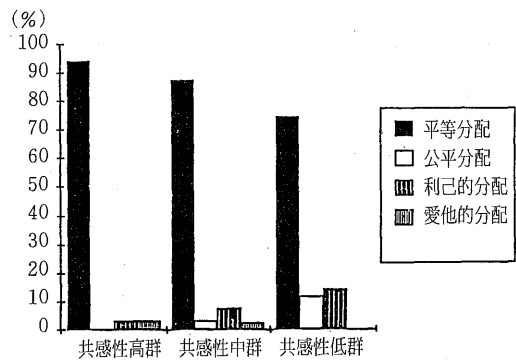


Fig. 4 高貢献度条件における共感性第2因子と分配行動

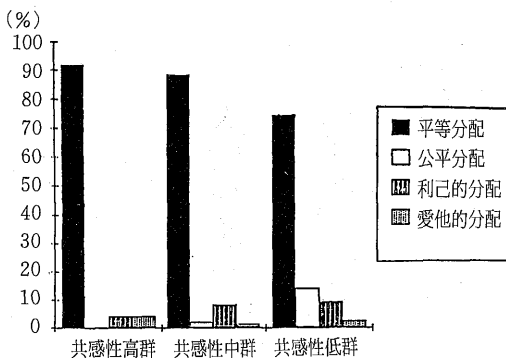


Fig. 3 高貢献度条件における共感性第1因子と分配行動

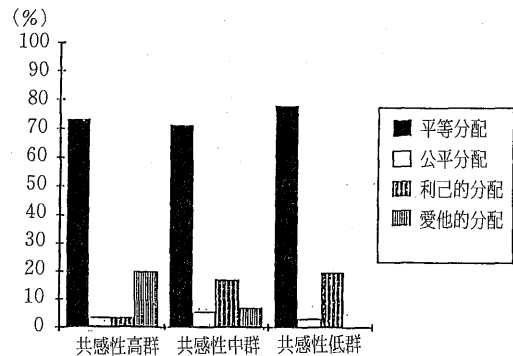


Fig. 5 低貢献度条件における共感性第3因子と分配行動

Table 2 分配理由と頻度

分配理由	頻度	%
1. 動作が早かった, 器用だったから	39	21.1
2. 一生懸命やった, 熱心にやった, 真剣にやったから	78	42.2
3. みんなのためにと思ったから	2	1.1
4. おかねがほしかったから, 何かもらえると思ったから	18	9.7
5. 他の人の家だから	8	4.3
6. 「わたしに負けないぞ」と思ったから	1	0.5
7. いつも家で手伝いをしていたから, 慣れていたから	18	9.7
8. 新聞を折るのが好きだったから, おもしろかったから	5	2.7
9. 紹介してくれたお礼に	2	1.1
10. ほめられたかったから	2	1.1
11. 雑にやったから	4	2.2
12. 1度にたくさん折ったから, 2枚ずつ折ったから	3	1.6
13. おじさんが手伝ったから	2	1.1
14. 友達だから	1	0.5
15. 先に折りはじめたから	2	1.1

さらに、「おかねがほしくて」、「いつも家の手伝いを
して慣れている」、が続いた。これらの理由は、能力、
努力、外的な報酬期待、内的な報酬期待、状況といっ
た5つに大別された。すなわち、{1}が能力に、{2,
6, 11}が努力に、{4, 10}が外的報酬期待に、{3,
8, 9, 14}が内的報酬期待に、{5, 7, 12, 13,
15}が状況に割り当てられた。そして、この理由と
共感性、及び分配行動との関係を検討した。

その結果、共感性との関係はFig. 6のとおりであ
り、共感性の高いものは努力に理由づけするものが
多く、共感性の低いものは能力に帰属するものが多
いことが示された($\chi^2=11.47, df=4, p<.05$)。
つぎに、分配行動との関係が検討されたが、能力や
状況を理由にしたものは全員が平等分配を行って
おり、努力を理由にしたものは10%が公平分配を行っ
ていた($\chi^2=7.50, df=2, p<.05$)。このようなこ
とから、共感性の高いものは友だちの努力を理由に
するものが多く、その結果、自分の貢献度の低いま
まに報酬を分配する公平分配を選択するものの割合
が高く、共感性の低いものには友だちの能力に帰属
するものが多く、平等分配が選択されることが明ら
かになった。

考 察

高貢献度条件においては、共感性の高いものに愛
他的分配が多く、低いものに公平分配、及び、利己
的分配が多かった。すなわち、自分が相手よりも大

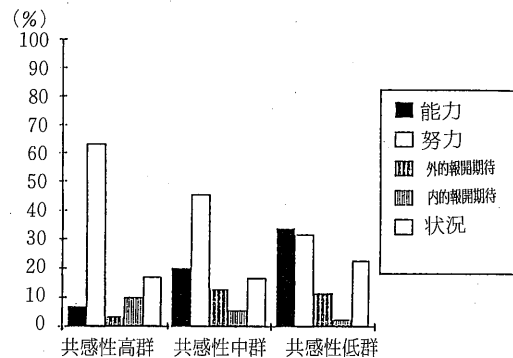


Fig. 6 共感性と分配理由

きく貢献したに関わらずに、共感性の高いものは相
手に報酬を多くしたり、平等に分配しているのに対
して、共感性の低いものは貢献度に応じて自分に多
く分配したり、貢献度以上の報酬を自分がとったり
していた。したがって、共感性は分配行動を規定す
る重要な要因であることが示唆された。低貢献度条
件においても同様の傾向が見られた。ただし、高貢
献度条件ほどは、共感性の影響は見られなかった。
これは、貢献度が相手よりも低い場合には相手の立
場を思いやる余裕がなく、自分への関心が強いと考
えられる。すなわち、自分の貢献度が相手よりも
少ない立場であるのに関わらずに、分配決定権を
与えられたことへのひげめや、遠慮を感じたりする
一方で、自分の利益を確保したいという欲求が生じ

るために相手に共感することが少ないからであろう。また、自分の貢献度が少ないのであるから相手に共感する必要性も少ないと言える。

因子分析から、本研究で測定した共感性を説明するものが「個人的苦痛及び感動」因子、「共感的関心」因子、「感受性」因子であることが明らかにされた。貢献度が自分の方が高い場合には、相手の個人的な苦痛を感じ取ったり、相手に注意が向けられるために分配行動が規定されるのに対して、低貢献度の場合には相手に関心が少なく、相手の立場を理解する心のゆとりがないことが示唆される。しかし、それでもなお相手の立場に気づいたものについては愛他的な分配行動が行われていた。分配理由についての結果から以下のことが考察される。貢献度が低い場合においても共感性の高いものは友だちの気持ちを配慮することができ、理解してやろうという気持ちから友だちががんばったことを認める割合が高いと言える。その結果、作業量にあわせた、この場合、友だちに多く分配する公平分配が選択されたといえる。これに対し、共感性の低いものは相手よりも自分に注意が働きやすいほか、「友だちががんばった」ことよりも「もともと友だちの方が器用だった」、「自分が雑にやった」といった合理化した理由づけがなされ、作業量の差を重大なこととして取り上げない傾向が強いと思われる。したがって、報酬を均等に分配する平等分配が選択されたと考えられる。

このように、本研究では、パーソナリティとしての共感性が、状況要因の影響を受けはするものの、分配行動をかなり規定している要因であることが示唆された。また、分配状況の作業量の差に対して原因推測が個人によって異なることが明らかにされたと同時に、個人特性としての共感性が、特定状況での個人の状況解釈や原因帰属による影響を強く受けることが予測される。したがって、今後はこうした共感性における個人差が、状況の解釈や事態の原因帰属とどのように相互作用して分配行動を規定するかについて検討することが望まれる。

(注1)

Davisの因子に対応すると、本研究での「個人的苦痛及び感動」因子は、“personal distress”と“fantasy”の2因子に、「共感的関心」因子は“perspective-taking”因子に、「感受性」因子は“empathic concern”因子に対応するものであった。本研究では目的が日本版の尺度の作成にないため、尺度についての検討は後の研究に譲ることにした。

引用文献

- Adams, J.S. 1963 Toward an understanding of inequity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **67**, 422-436.
- Archer, R., Diaz-Loving, R., Gollwitzer, P., Davis, M., & Foushee, H.C. 1981 The role of dispositional empathy and social evaluation in the empathic mediation of helping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 786-796.
- Aronfreed, J. 1970 The socialization of altruistic and sympathetic behavior: Some theoretical and experimental analyses. In J. Macauley & L. Berkowitz (Eds.), *Altruism and helping behavior*. New York: Academic Press.
- Barnett, M.A. & Thompson, S. 1985 The role of perspective taking and empathy in children's Machiavellianism, prosocial behavior, and motive for helping. *The Journal of Genetic Psychology*, **146**, 295-305.
- Batson, C.D., Duncan, B.D., Ackerman, P., Buckley, T., & Birch, K. 1981 Is empathic emotion a source of altruistic motivation? *Journal of personality and Social Psychology*, **40**, 290-302.
- Davis, M.H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- Davis, M.H. 1983 The effects of dispositional empathy on emotional reactions and helping: A multidimensional approach. *Journal of Personality*, **51**, 167-184.
- Hoffman, M.L. 1975 Developmental synthesis of affect and cognition and its implication for altruistic motivation. *Developmental Psychology*, **11**, 607-622.
- Hook, J.G. 1978 The development of equity and logico-mathematical thinking. *Child Development*, **49**, 1035-1044.
- Iannotti, R.J. 1985 Naturalistic and structured assessments of prosocial behavior in preschool children: The influence of empathy and perspective taking. *Developmental Psychology*, **21**, 46-55.
- Krudson, K.H.M., & Kagan, S. 1982 Differential Development of empathy and prosocial behavior. *The Journal of Genetic Psychology*,

- 140, 249-251.
- Landau, S., & Leventhal, G.S. 1976 A simulation study of administrators' behavior toward employees who receive job offers. *Journal of Applied Social Psychology*, **6**, 291-306.
- Leventhal, G.S. 1976 Fairness in social relationship. In J. Thibaut, J. Spence, R. Carson (Eds.); *Contemporary topics in social psychology*. Morristown, NJ: General Learning Press.
- Leventhal, G.S., & Anderson, D. 1970 Self-interest and the maintenance of equity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **15**, 57-62.
- Leventhal, G.S., & Lane, D. 1970 Sex, age and equity behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **23**, 88-102.
- Leventhal, G.S., Micaels, J.W., & Sanford, C. 1972 Inequity and interpersonal conflict. *Journal of Personality and Social Psychology*, **23**, 88-102.
- Mikula, G. 1974 Nationality, performance, and sex as determinants of reward allocation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 435-440.
- Reis, H.T., & Gruzen, J. 1976 On meditating equity, equality, and self-interest: The role of self-presentation in social exchange. *Journal of Experimental Social Psychology*, **40**, 465-478.
- Reis, H.T., & Jackson, L.A. 1981 Sex differences in reward allocation: Subjects, partners, and tasks. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 465-478.
- Sampson, E.E. 1975 On Justice as equality. *The Journal of Social Issues*, **31**, 45-64.
- Schwartz, S.H. 1975 The justice of need and the activation of humanitarian norms. *Journal of Social Issues*, **31**, 111-136.
- Shapiro, E. 1975 Effect of expectations of future interactions on reward allocations in dyads: Equity or equality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 873-880.
- Shirley, M.M. 1979 Interrelationships among dependency, empathy, and sharing: A preliminary study. *Motivation & Emotion*, **3**, 183-199.
- Toi, M., & Batson, C.D. 1982 More evidence that empathy is a source of altruistic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 281-292.
- 渡辺弥生 1986 幼児・児童の報酬分配における分配様式の決定について 教育心理学研究, **34**, 185-190.